

<原著>

精神保健福祉援助実習における実習評価と自我状態との関連性

柴原 直樹・井澤 嘉之・直嶋美恵子

Relationships in Psychiatric Social Worker's Training between Evaluations by a Supervisor and Ego States

Naoki SHIBAHARA, Yoshiyuki IZAWA, Mieko NAOSHIMA

The purpose of this research was to examine relationships in PSW's training between evaluations by a supervisor and Ego states, and to propose a triangle relationship among communication skills, evaluations by a supervisor, and patterns of Egograms. In total, 106 university students took part in this research. The results showed that communication skills correlated with comprehensive evaluations, that high communication skills related to the N profile with high A (Adult) scores, and that high comprehensive evaluations enhanced A scores in the N profile. These results support the triangle relation.

Key words : psychiatric social workers, evaluation, ego states

PSW 実習評価 自我状態

はじめに

精神保健福祉士 (PSW) を養成する教育機関にとって、医療機関および非医療機関における現場実習は、カリキュラム上極めて重要な位置を占めている。遺伝的要因、学校・職場・家族などの環境的要因、ストレスといった心理的要因等の複雑な絡み合いが起因となり精神障害を発症すると言われているが、現代のようなグローバル化した多様な社会において、その有病率は年々増加傾向にあるという (内閣府 - 平成25年版障害者白書 - 参照)。現場実習は、そのような人と直接関わりながら、彼らの精神障害の状況や治療過程を家族や社会といった背景の中で理解し、医師や看護師、あるいは精神保健福祉士や作業療法士らがどのように連携して彼らの治療や支援にあたっているのかを知る重要な機会を提供す

る (井澤・柴原・山田, 2015¹⁾; 柴原・井澤・山田, 2015a²⁾; 柴原・井澤・山田, 2015b³⁾ 参照)。

また、現場実習を通して実習生は精神に障害のある利用者を総合的に捉え、日常生活援助を中心に問題解決のプロセスを学んでいくが、そこでは、初めて接した利用者とのコミュニケーションを図りながら彼らの気持ちを理解し、彼らと適切な人間関係を構築していくためのスキルが要求される。しかし、最近の青年の特徴として挙げられる社会性の欠如、精神的未熟さ、あるいは対人関係からの逃避 (鳴沢, 2000⁴⁾ 参照) 故に、現場実習においてコミュニケーションを通して相手を理解し、相手のケアを試みることには相当ストレスを感じ、現場実習をリタイアするケースも報告されている。PSW を目指す実習生が、このような困難を克服し成長していくために

は、実習で積極的に対人関係を築き、他者評価による自己像を受け入れながら、自我を形成していくことが大切となってくる（白鳥, 2000⁵⁾ 参照）。

ところで、中村、足立、天野ら（2007）⁶⁾ は看護学生を対象とした調査結果からコミュニケーションスキルと自我状態との関連性を指摘している。また、井澤ら（2015）¹⁾ は PSW を目指す実習生の対人援助におけるコミュニケーションスキルが実習評価に影響を及ぼす重要な要因であると述べている。ここから、実習生の自我状態と指導員による実習評価との間に何らかの関連性があるのではないかと推測される。もし、そうならコミュニケーションスキルと自我状態および実習評価との間に三つ巴（トライアングル）の関係が成立する。

そこで、精神保健福祉援助実習の事前学習が始まる3年次における自我状態のどのような側面が、実際の現場実習における評価に影響を及ぼし、これらとコミュニケーションスキルの間にどのようなトライアングル関係が存在するのかを検討する目的で調査を行った。

方法

対象者 2010年から2015年の6年間にかけて4年次に精神保健福祉援助実習に参加したK大学の学生で、データが利用可能な106名（男性33名、女性73）を調査対象とした。ただし、2015年度の実習生8名は医療機関および非医

療機関の2か所で実習を行ったため、データ分析の対象は114名となった（表1参照）。

調査方法 実習評価については、K大学が作成した精神保健福祉援助実習評価表に記入された実習指導者の実習生に対する評価結果を利用した。実習評価表は13項目から成り、項目13は総合評価である。評価はAからDの4段階で表し、それぞれ「優れている」、「良好」、「普通」、「努力を要する」に対応している（表2参照）。なお、本研究ではA = 4、B = 3、C = 2、D = 1のようにそれぞれの評価段階を4から1の点数に変換してデータ分析を行った。

また、自我状態の測定に関してはK大学における心理検査法実習で実施された東大式エゴグラム－新版 TEG II（2006）⁷⁾ の検査結果を利用した。このスケールにおいて、自我状態は①親の自我状態（P）、②大人の自我状態（A）、③子どもの自我状態（C）に区分される。さらにPは父親的な役割を担う批判的な自我状態（CP）と母親的な役割を担う養育的な自我状態（NP）に、Cはもって生まれた自然な姿である自由な子ども（FC）と親の影響を受けた順応した子ども（AC）の自我状態に分けられる。質問項目は、自我状態を測定する50項目にL尺度（Lie scale）3項目を加えた53項目から成っている。これらの質問項目に対し、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法による回答を求め、それぞれの回答に対して、2点、1点、0点を割り当て得点化した。

表1 各年度における男女別調査対象者の数

	2010	2011	2012	2013	2014	2015
男性	6	9	4	8	2	3
女性	24	16	16	11	2	5
計	30	25	20	19	4	8

注) 2015年度の実習生8名は医療機関・非医療機関の両方で実習を行った。

結果

実習評価得点

実習評価表の各項目における評価点の平均値および標準偏差を表2に示す。項目5「実習指導者の指導助言を真面目に受入れ、それを活用しようとする姿勢があった」および項目12「実習施設・関連施設の職員等とよい協力関係を作ることができた」における評価点の平均値はそれぞれ3.2と高いが、項目7「利用者を理解し、ニーズを把握することができた」では2.6、項目8「利用者に対して適切な援助ができた」および項目9「集団に対して適切な援助ができた」においては、それぞれ2.5と低いことが分かった。このことは、指導員や職員と比べ、利用者との間に適切なコミュニケーションに基づいた良好な人間関係を構築することが実習生にとって困難であったことを意味している。

また、総合評価（項目13）と他の12項目との関係を調べるために相関分析を行った。そ

の結果、総合評価と他のすべての評価項目との間に有意な相関関係が見られた（表3参照）。そこで、12項目中どれが総合評価に影響を与えているのか調べるために、総合評価を目的変数、項目1～12を目的変数とする強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、12項目中、項目3、6、9が有意であり、項目7に有意傾向が見られた（表4参照）。これは、実習指導者の「総合評価」に関する情報の9割近くが項目3「常に積極的、主体的に学習する姿勢があった」、項目6「実習施設・機関等の目的及び機能をよく理解して行動した」、および項目9「集団に対して適切な援助ができた」の3項目で説明できることを示している。この結果から、指導員による総合評価は、実習生がどれだけ積極的・主体的に集団に対する援助に関わっているか、実習機関の目的や機能をどれだけ理解しているかによって判断される傾向にあることが分かった。

表2 精神保健福祉援助実習評価表および各項目の平均値（Mean）と標準偏差（SD）

（評価点の参考基準） A 優れている B 良好 C 普通 D 努力を要する	評価点	
	Mean	SD
評価のポイント		
1. 専門職としての倫理（人権擁護、守秘義務の尊重等の義務）をわきまえて行動できた。	3.1	0.91
2. 仕事上の責任・実習期間を通し出勤時間・規則の遵守・連絡・報告等・がよくできた。	3.1	0.88
3. 常に積極的、主体的に学習する姿勢があった。	2.8	0.95
4. 本人の設定した課題に対して積極的に取り組んでいた。	2.8	0.91
5. 実習指導者の指導助言を真面目に受入れ、それを活用しようとする姿勢があった。	3.2	0.87
6. 実習施設・機関等の目的及び機能をよく理解して行動した。	2.8	0.89
7. 利用者を理解し、ニーズを把握することができた。	2.6	0.89
8. 利用者に対して適切な援助ができた。	2.5	0.86
9. 集団に対して適切な援助ができた。	2.5	0.85
10. 実習記録をはじめ各種記録を適切に取り、整理・保管・活用した。	2.9	1.00
11. 自分自身の性格・行動傾向についてよく自覚し、洞察しながら実習した。	2.8	0.92
12. 実習施設・関連施設の職員等とよい協力関係を作ることができた。	3.2	0.87
13. 総合評価（上記の1～12の各評価の総合評価として）	2.9	0.85

注）評価点は A = 4、B = 3、C = 2、D = 1に変換

表3 項目13（総合評価）と項目1～12との相関

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
相関係数	.748**	.645**	.752**	.761**	.800**	.832**	.789**	.760**	.780**	.639**	.788**	.784**

* $p < .05$ ** $p < .01$

表4 強制投入法による重回帰分析の結果

$F(12, 101) = 63.46, p < .001$ $R = .940$ $R^2 = .883$			
評価項目	β 係数	t 値	有意確率
項目1	.069	1.145	.255
項目2	.071	1.356	.178
項目3	.178	2.974	.004
項目4	.029	.448	.655
項目5	.038	.532	.596
項目6	.213	3.346	.001
項目7	.115	1.689	.094
項目8	-.029	-.361	.718
項目9	.173	2.364	.020
項目10	.082	1.446	.151
項目11	.104	1.630	.106
項目12	.107	1.627	.107

自我状態

5つの自我状態の素点の平均値を表5に示す。また、それぞれの素点に対しパーセント値を基準に5段階に変換し得点化した場合の平均値も表5に示す（1点=0～5%未満、2点=5～25%未満、3点=25～75%未満、4点=75～95%未満、5点=95～100%）。

変換得点による調査対象者の平均値に基づくエゴグラムパターンは図1に示すようにAC優位型となった。このタイプは、人に気

づかいして「NO」と言えず、与えられた仕事はこなせても、自ら先頭に立って何かを成し遂げることに困難を感じることを特徴とする（東大医学部心療内科，2007）⁸⁾。

次に、5つの自我状態の間の相関を調べると、①ACはCPおよびFCと有意な負の相関関係にある、②AはCPとのみ有意な正の相関関係にある、③NPはFCとCPと有意な正の相関関係にあることが分かった（表6参照）。この結果は、実習生の平均的なエゴグラムパターンがCPとFCが低くACが高いAC優位型であることと対応している。

実習評価と自我状態との関係

実習の総合評価（項目13）と自我状態の低位尺度との関係を調べるために相関分析を行った。その結果、総合評価とそれぞれの低位尺度との間に有意な相関は見られなかった（表7参照）。ただし、その後の分析で、実習評価の項目3（ $r = .196, p < .05$ ）および項目4（ $r = .271, p < .01$ ）はNPと、項目9（ $r = .211, p < .05$ ）はAと有意な正の相関関係にあることが分かった。つまり、「常に積極的、主体的に学習する姿勢」や「本人の設定した課題に対する積極的な取り組み」がみられたと評価された実習生ほど、母親に象徴される養育的な自我状態が高い傾向にあることが分かった。また、「集団に対する適切な援助」ができたと評価された実習生ほど、事実に基づき、

表5 各自我状態における素点および変換得点の平均値（SD）

	CP	NP	A	FC	AC
素点	9.6 (4.55)	13.1 (4.56)	10.2 (5.36)	10.2 (5.23)	14.4 (5.14)
変換得点	2.5 (0.96)	3.0 (1.14)	2.9 (1.00)	2.5 (1.08)	3.7 (0.98)

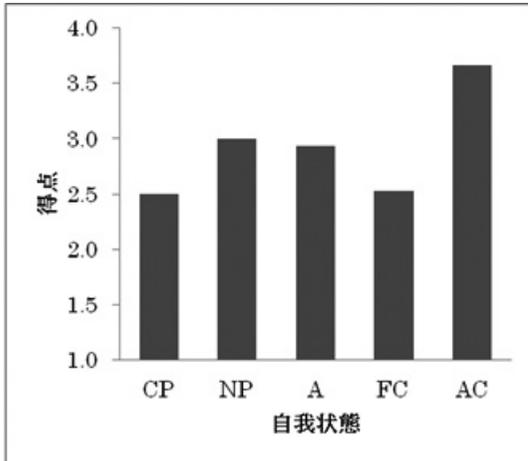


図1 変換得点の平均値に基づくエゴグラムパターン

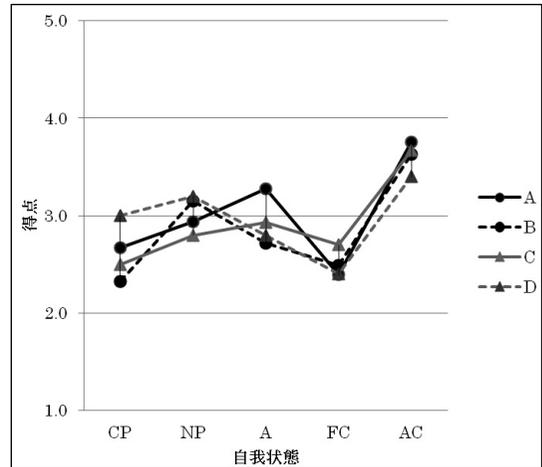


図2 評価別 (A～D) による各自我状態の平均値

物事を客観的かつ論理的に理解し、判断しようとする大人の自我状態が高い傾向にあることも分かった。

指導員による実習の総合評価で、A 評価は 33 名、B 評価は 46 名、C 評価は 30 名、D 評価は 5 名であった。上述したように、実習生の尺度平均値によるエゴグラムパターンは AC 優位型であるが、図 2 に示すように A～D の評価ごとにおけるエゴグラムパターンにはやや違いが見られる。特に、A 評価「優れている」を受けた実習生 33 名の平均値に基づくエゴグラムパターンは、A がやや高い N 型、B 評価「良好」を受けた実習生 46 名では NP

がやや高い N 型の傾向を示している。A 評価であった実習生の自我状態の A 尺度が相対的に高くなったという結果は、看護学生を対象にした豊田・任・中井 (1996)⁹⁾ の調査結果と一致している。

考察

本研究の目的は、実習生のコミュニケーションスキルと実習の総合評価および自我状態との間に図 3 のようなトライアングルの関係が存在することを仮定し、三者がどのように関連し合っているのか検討することであっ

表6 5つの自我状態間の相関

	CP	NP	A	FC	AC
CP	1	.410**	.346**	.383**	-.253**
NP		1	.101	.414**	-.102
A			1	.047	-.039
FC				1	-.357**
AC					1

* $p < .05$ ** $p < .01$

表7 総合評価と各自我状態 (変換得点) との相関

	CP	NP	A	FC	AC
総合評価	.005	.018	.130	-.080	.060

* $p < .05$ ** $p < .01$

た。

まず、対人援助におけるコミュニケーションスキルに関係すると思われる評価項目6、7、および8は、総合評価と正の相関関係にあることが示された。つまり、コミュニケーションスキルが高ければ指導員による実習評価も高い傾向にあることが分かった。そこで、これら3項目に対する評価の合計が12点中11点以上の実習生を高コミュニケーションスキル群（15名）、4点以下の実習生を低コミュニケーションスキル群（10名）とし、両者の平均のエゴグラムパターンを比較してみた。図4に示すように、低コミュニケーションスキル群はAC以外の4つの下位尺度が低いAC優位型のパターンを示した。また、高

コミュニケーションスキル群では、ACが高くAが相対的に高いN型のパターンを示した。この高コミュニケーションスキル群のエゴグラムパターンは、まさに実習の総合評価においてA評価を受けた実習生の平均のエゴグラムパターンと一致する。

相関分析の結果では実習の総合評価とエゴグラムの各下位尺度との間に有意な相関関係は見られなかったが、下位尺度といった個々の要素ではなく、エゴグラムの全体のパターンに注目すると、トライアングルの関係に特徴的な傾向が見えてくる。すなわち、コミュニケーションスキルが高い実習生は、指導員による評価が高い傾向にあり、そのエゴグラムパターンはACが高くAが相対的に高いN型であるが、コミュニケーションスキルがやや低くなると実習評価もやや下がる傾向にあり、そのエゴグラムパターンは、ACは高いままであるが、Aがやや低下しNPが相対的に高くなるN型を示す。さらにコミュニケーションスキルが低下すると、実習評価はさらに下がり、そのエゴグラムパターンはACが高く、他の尺度は相対的に低いAC優位型となる。

ところで、看護学生の自我状態については、内・津田・高谷（1998）^{10）}はNPとACが相対的に高いN型が多い傾向にあると報告しているが、白鳥（2000）^{5）}はむしろFCとACも相対的に高いNP優位型であるという結果を得ている。その看護学生が目指す看護師の理想的なエゴグラムパターンは、親切で寛容的、かつ共感性に優れ、良い人間関係を築ける特徴を持つ「への字」を描くNP優位型であるとわれている（飯田、金井、尾岸、1986^{11）}；白鳥、2000^{5）}参照）。PSWの場合も、医療関係に従事するということを考慮すると、同様のエゴグラムパターンが望ましいと思われる。

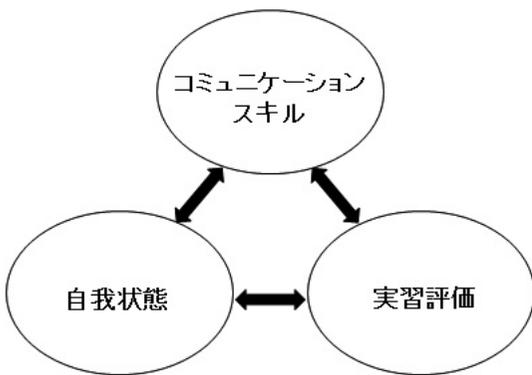


図3トライアングル関係

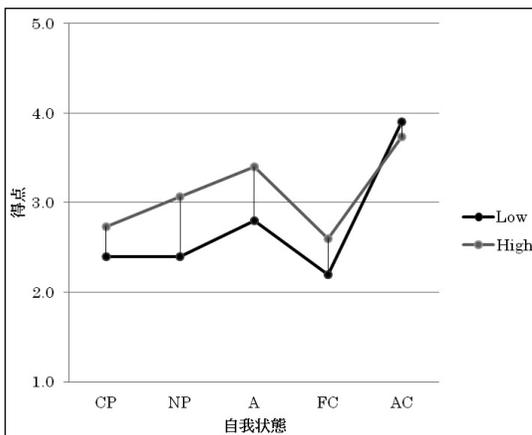


図4コミュニケーションスキルの高低とエゴグラムパターン

本研究から、コミュニケーションスキルの高低が指導員による実習評価の優劣と関連し、さらにこれらが特定のエゴグラムパターンと関連していることが示されたが、これはK大学でPSWを目指して勉強している学生についてのものであり、医療福祉関係を勉強している学生に一般化できるとは言い難い。今後の研究課題である。

引用文献

- 1) 井澤嘉之・柴原直樹・山田州広：精神保健援助実習における実習指導者による実習評価と実習生の自己評価との差 神戸医療福祉大学紀要, 16 (1), 1-9, 2015
- 2) 柴原直樹・井澤嘉之・山田州広：精神保健援助実習における実習評価と顕在性不安との関連 神戸医療福祉大学紀要, 16 (1), 31-36, 2015
- 3) 柴原直樹・井澤嘉之・山田州広：精神保健福祉援助実習における実習評価と外向性および神経症的傾向との関連 神戸医療福祉大学紀要, 16 (1), 37-44, 2015
- 4) 鳴沢實：若者達と対人関係ストレス 日本看護学教育学会誌, 9, 42-45, 2000
- 5) 白鳥さつき：基礎看護実習前の看護学生の自我状態についての考察 - 大学生と短期大学生のエゴグラム調査の比較から - 山梨医科大紀要 第17巻, 38-41, 2000
- 6) 中村小百合・足立はるゑ・天野瑞枝・盛田麻己子・柴山健三：看護学生のコミュニケーションスキル育成に関する研究 (第1報) - コミュニケーションスキルと自我状態との関連 - 日本看護医療学会雑誌 9 巻 2 号, 18-26, 2007
- 7) 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会：新版 TEG II 解説とエゴグラム・パターン 金子書房, 東京, 2006
- 8) 東京大学医学部心療内科：新版エゴグラム・パターン-TEG (東大式エゴグラム) 第2版による性格分析 - 金子書房, 東京, 2007
- 9) 豊田久美子・任和子・中井義勝：エゴグラムからみた看護学生の自我状態と実習評価との関連 京都大学医療技術短期大学部紀要第16号, 77-82, 1996
- 10) 内正子・津田紀子・高谷嘉枝：基礎看護技術演習前後における学生のエゴグラムの変化 - 学生が主体となる教授方法を通しての考察 神戸大学医学部保健学科紀要, 14, 109-116, 1998
- 11) 飯田真佐子・金井ヒロ・尾岸恵三子：エゴグラムからみた看護婦の成熟性について 看護展望, 11 (9), 34-41, 1986